『西南アジア研究』No. 58, 2003

ナーイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について

稲葉　穣

はじめに

アフガニスタン東部，ガズニ（Ghazni）から南西カンダハール（Qandahar）方面に向かう道の途中にカラバーグ（Qarabāgh）のまちがある。旧ソ連軍が侵攻しアフガニスタンが長い戦乱時代を迎える少し前，1974年に，当時ガズニおよびその近辺で調査を行っていたイタリア考古学調査隊（Italian Archaeological Mission）は，カラバーグから西へ向かいザルダールー（Zardālū）峠を越えたところ，ホマーイ・カラ（Homāy Qal'a）と呼ばれる周囲から隔絶した場所で一群の石窟寺院を発見した。1975～1976年に再び調査に赴いた同調査隊のヴェラルディ（Giovanni Verardi）は，ホマーイ・カラ近辺およびそれに隣接するジャーグリー（Jāghurī）地域において，ナーイ・カラ（Nāy Qal'a），Shāh Khwāja, Tapa Senaubar, Jūghūr, Sangdara, Ḥeṣār, Bayak, Lālākhīl, タパ・ザイトゥーン（Tapa Zaytun）等，幾つもの同様の石窟寺院群を発見した。水系から言うとナーイ・カラとホマーイ・カラのみはタルナク（Tarnak）川支流の最上流域に位置し，それ以外は分水嶺たるDehbaday山系（最高点の標高は3,751 m）を挟んだアルガンダーブ（Arghandāb）川の最上流域に属するが，最も東にあるナーイ・カラと最も西にあるタパ・ザイトゥーンの間は直線距離で30 kmほどしか離れておらず，これらが一つのグループを形成していることは明らかである［Verardi 1977; Taddei & Verardi 1984: 66］（図1参照）。

後述するように，おおよそ7～9世紀という時代枠に属すと考えられ，特異な性格と立地を持つこれらの石窟群に関しては，その後のアフガニスタンの戦乱のために継続的調査が途絶してしまったせいもあって，十分な考察がなされていない。本稿はこれらの石窟群の代表的なものの一つであるナーイ・カラをとりあげ，その比定を手がかりに7～8世紀の東部アフガニスタンの歴史と「道」のあり方について考察を行おうとするものである。

I

アフガニスタンの歴史家であるハビービー（'Abd al-Ḥayy Ḥabībī）［TG: 439 n.6］およびジャラーリー（Ghulām Jīlānī Jalālī）［1973: 334－335］によれば，ナーイ・カラは歴史文献の中に「Qal'a-i Nāy（ナーイの砦）」として現れるという。まずこの比定について考え

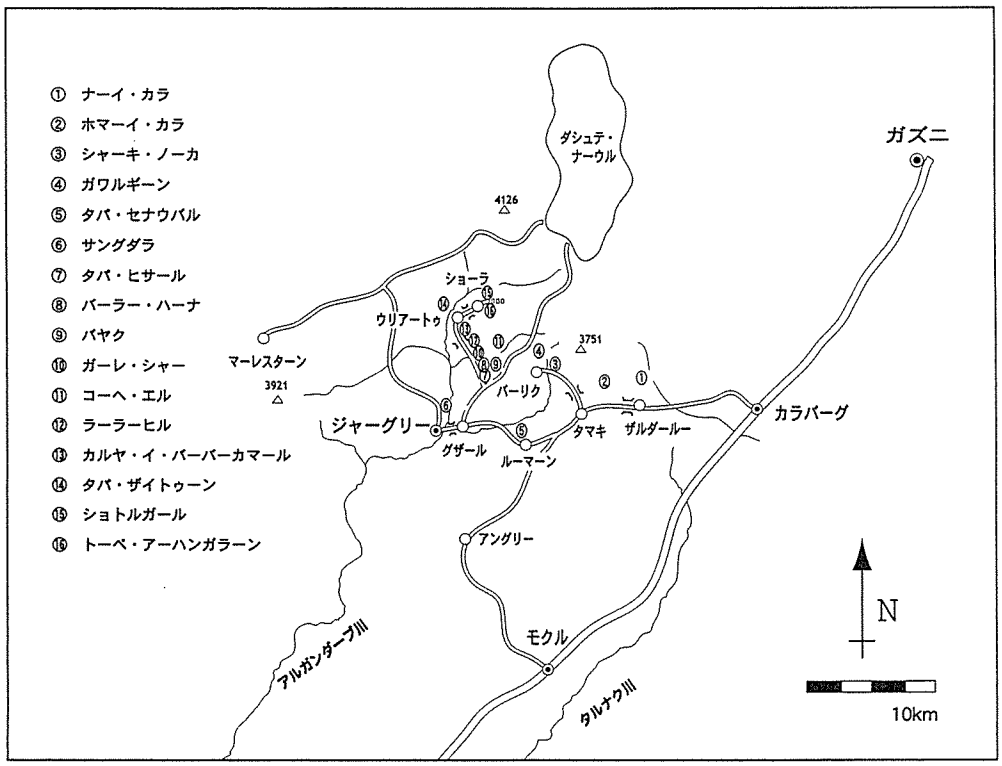

図1 カラバーグ～ジャーグリー地域の石窟分布図
(Taddei & Verardi 1984, Drawing 8 をもとに作図)

てみたい。

西暦11世紀，ガズナ朝の書記官僚であったバイハキー (Abū al-Faḍl-i Bayhaqī) によって書かれたペルシア語年代記である *Tārīkh-i Bayhaqī* は，425年シャッワール月 (1034年9月) ガズナ朝第五代君主マスウード (Mas'ūd b. Maḥmūd) が，ジュルジャーン (Jurjān=Gurgān) 遠征のため，ガズニーン (Ghaznīn=Ghazni) のまちからブスト (Bust) 方面へ向けて出発する時の状況を次のように記している。

(1) ホラーサーン，ホラズム，レイ (Rayy)，ジバール (Jibāl) およびその他の地域の事柄が前述のごとくに定まり，移動の時がきた。アミール・マスウードはブストにむけて出立することに決めた。そこからヘラート (Herat) の方へと向かうのである。ホラーサーンの中心であるヘラートにおいて，諸々の事柄を適切に処理しようとしたのであった。アミール・マスウードはアミール・サイード (Sa'īd b. Mas'ūd) に賜衣を与え，彼に王都ガズニーンを託し，宮殿に居を据えて *maẓālim* 法廷を主催させることにした。*sarhang* のアブー・アリー・クトワール (Abū 'Alī Kutwāl) は補佐として傅役として王子の側につかえることとなった。アミールの他の子供達は，廷人達，ハーディム達，臣達とともに Nāy と Dīrī の砦に送られた。王の手綱と同道するアミール・マウドゥー

ド（Mawdūd b. Mas'ūd）にも賜衣が与えられた。[TB : 557 – 558]

また430年（1039年），同じくマスウードがセルジューク・テュルクに対する戦いのためガズニーンからホラーサーンに向けて出発する時のことを述べた，同書の別の箇所には次のようにある。

（2） この年のムハッラム月の朔日（1038年10月3日）は水曜日であった。2日木曜日，*sarāy parda* が運び出され，Bāgh–i Fīrūzī の裏手にあった基台のところに設営された。アミール［マスウード］は，アミールとしてガズニーンに残るアミール・サイードに賜衣を与えるよう命じた。サイードのハージブ達，書記達，ナディーム達，アブー・アリー・クトワール，*dīwān* の長官 Abū Sa'īd–i Sahl，*barīd* の長官Ḥasan–i 'Ubaydallāh らにも高価な賜衣が与えられた。統治に必要な全ての物がその賜衣には含まれていた。同様にハージブ達，書記達，ナディーム達にも同じようなものが与えられた。他の王子達はあらかじめ手筈してあったとおり，後宮とともに Nāy Mas'ūdī，Dīdī Rū の諸砦へと送られた。アミール［マスウード］はムハッラム月4日にガズニーンを発った。彼は Bāgh–i Fīrūzī に設営してあった *sarāy parda* に入り，軍および随行者達が全員［まちから］出発するのを待った。それからあらためて出発し進軍した。[TB : 736 – 737]

ここでは Nāy Mas'ūdī と書かれているが，校訂本によれば他の写本には「Nāy wa Mas-'ūdī」ともあり，また Dīdī Rū が Dīrī とされている写本も存在することから，この砦を（1）に言及されているものと同一と見なして良いだろう。これらの二つの記述から当時この Qal'a–i Nāy が，君主の留守中に事故あることを懸念して若い王子達や財物を避難させておく場所として用いられていたことがわかる。

同じく11世紀にガズナ朝治下で書かれた史書である *Tārīkh–i Gardīzī*（*Zayn al–Akhbār*）は，Dandānaqān における対セルジューク戦の決定的敗北の後，マスウードが態勢建て直しのためインドへ向けて出発する際の状況を次のように記している。

（3） アミール［マウドゥード］は Hupyān に着くと，そこに滞留した。マスウードは次いでアミール・マジュドゥード（Majdūd b. Mas'ūd）を2万騎とともにムルタン（Multān）に送り，アフガン族や叛徒達がいたガズニーン近辺の山地方面にはアミール・イーザドヤール（Īzadyār b. Mas'ūd）を送った。そして彼（イーザドヤール）に言った。「災厄の生ぜぬよう，彼の地をしっかりと保持せよ」と。それからマスウードは，アミール・マフムードが，Dīdī Rū, Mandīsh, Nāy Lāmān, Maranj, Sāmad Kūt といった諸砦に貯蔵していた財貨の全てをガズニーンに運ぶよう命じた。[TG : 438]

Tārīkh–i Gardīzī の校訂者ハビービーが，写本にある「پای لامان Pāy Lāmān」をここで Nāy Lāmān と改め，それを（1）および（2）に現れた Nāy と同じだと見なしているのは，一緒に言及されている他の砦の名の中に Dīdī Rū があることから見てもおそらく正しい［TG : 438, n.2 ; Арендс & Епифанова 1991 : 119, 157］。そして *Tārīkh–i Gardīzī* のこ

の記述はマフムードの時代からこの砦が財貨の隠し場所として用いられていたことを教えてくれる。

さて，Nāy Lāmān が Qal'a-i Nāy の別名だとすれば，我々は 13 世紀に書かれたスィースターン（Sīstān）の地方史である *Tārīkh-i Sīstān* の中に興味深い記述を見いだすことが出来る。

（4） ヤアクーブ（Ya'qūb b. al-Layth）はスィースターンに戻り，つかのま滞在した後，258 年のラビー・アルアッワル月の終わりまで 4 日残った土曜日（872 年 2 月 9 日），カーブル（Kābul）に向けて出発した。*rtbyl*[1] の息子を討つためであった。彼がザーブリスターン（Zābulistān）に着くと，*rtbyl* の息子は Nāy Lāmān の砦に逃げ込み立て籠もった。ヤアクーブは砦を包囲し，攻城戦を遂行してついに彼を砦から引っぱり出し，捕らえた。

それからヤアクーブはバーミヤーン（Bāmiyān）を経由してバルフ（Balkh）に向かった。バルフの支配者 Dā'ud b. 'Abbās はヤアクーブが襲来するという知らせを聞き逃亡した。まちの人々は *kuhandiz* に立て籠もった。ヤアクーブはバルフに入り，まちを接収した。彼の軍は多くの人々を殺し，まちを掠奪した。[TS:216－217;Gold1976:172]

このように 9 世紀後半の時点でもやはり，Nāy Lāmān は *rtbyl* の息子の避難場所であり，また同王国の最後の抵抗拠点であったのである。

ところで Qal'a-i Nāy は，11 世紀の詩人マスウード・サアド・サルマーン（Mas'ūd Sa'd-i Salmān）が幽閉された場所としてもよく知られている。マスウード・サアドはラホール（Lāhūr）に生まれ，しばらくの間ガズナ朝の宮廷で，おそらくはサイフ・アッダウラ・マフムード（Sayf al-Dawla Maḥmūd b. Ibrāhīm）に仕えていた。しかしながら 40 歳になったころ，謀反の嫌疑を掛けられて投獄された。彼は Su, Dahak および Nāy において十数年の獄中生活を送った。これらの砦の名前は彼の詩の中にたびたび現れている［DMS：22, 479, 685－687］。また 12 世紀の君主鑑文学である *Chahār Maqāla* はマスウード・サアドについて次のように記している。

（5） 472 年（1079 年）ある者がスルタン・イブラーヒーム（Ibrāhīm b. Mas'ūd）に，

1） *Tārīkh-i Sīstān* のテキストでは *znbyl* と書かれており，M. Gold はテキストの校訂者 Bahār に従って Zanbil と読んでいる。9 世紀まで存続するザーブリスターンの王国の支配者の称号と考えられているこの語は，Ṭabarī 等の他資料では *rtbyl* と書かれている。正しくは如何なる言葉であり，それをどう読むべきかという点についてはこれまで多くの議論がなされている（cf. Marquart 1901：248 ff.；Scarcia, 1965；Harmatta 1969：405－6；Bombaci 1970：59；Rehman 1979：180；Bosworth 1994：91－95；Harmatta 1996：365）。大別すれば Marquart, Scarcia, Bosworth は *znbyl* 説を，Bombaci, Rehman は *rtbyl* 説をとり，Harmatta はそれらと異なり，*Zißil* < Zābul という読みを提唱する。筆者は，これが *rtbyl* と読まれるべきであり，そもそもテュルク語のタイトル *iltebär* に由来するものであるというボンバーチの説を支持する［稲葉 1991］。なお，Sims-Williams 2002：235 も参照のこと。

彼の息子サイフ・アッダウラ・アミール・マフムードが，イラクのマリクシャー（Malikshāh＝セルジューク朝第三代スルタン）のもとへ出奔しようとしていると讒言した。この者はスルタンの［マリクシャーへの］嫉妬心をかき立てることに成功し，スルタンはサイフ・アッダウラを捕らえるよう命じた。サイフ・アッダウラはある砦に幽閉された。彼のナディーム達も同様にいくつかの砦に送られて幽閉された。それらの者たちの中にはマスウード・サアド・サルマーンがいた。彼は W. jīristān の Qal'a-i Nāy に送られた。[ChM : 45]

これによれば，彼を投獄したのはガズナ朝のスルタン，イブラーヒーム（在位 1059－1099）であったが，13 世紀の史書である *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* によれば，このイブラーヒーム自身も，兄弟であるファッルフザード（Farrukhzād b. Mas'ūd）の治世（1053－1059）の間 Qal'a-i Nāy に幽閉されていたという［ṬN : i－238］[2]。これらの事実は，この砦が牢獄，幽閉所として用いられていたことを示している[3]。

以上の歴史書，鑑文学の記述から明らかになるのは，Qal'a-i Nāy が君主不在時の若い王子達の避難所，財宝の隠し場所，敵の攻撃に対する抵抗拠点，そして罪人の牢獄，幽閉場所として用いられていたことである。このような用途は，この砦が王都であるガズニーンからそれほど近くもなく，かといってあまり遠くもなく，しかもある程度険阻で接近が困難な場所であることを要請するが，現在のナーイ・カラはカラバーグから西へ進み，ザルダールー峠を越えたところで幹線から逸れ，さらに東へ 12 km ほど行ってやっとたどり着ける場所にある。ナーイ・カラの山塊は Dahan-e Jārā 村に覆い被さるようにして，Sākoh からザルダールー峠まで谷全体を見下ろしながら，長く狭い谷のなかほどに孤立して聳え立っているという［Verardi 1977 : 4］から，上述の条件に適合する。それゆえハビービーやジャラーリーの比定通りこの両者をほぼ同一の地と考えて良いだろう。

II

さて，以上の考察に基づいてもう一度前掲の諸史料を見直した時，*Chahār Maqāla* の記

2）イブラーヒームが Qal'a-i Nāy に幽閉されていたことは，Fakhr-i Mudabbir の *Ādāb al-Ḥarb wa Shujā'a* に見える逸話からも知れる。それによれば，Fakhr-i Mudabbir の曾祖父であり，またイブラーヒームの乳兄弟であった Sharīf Abū al-Faraj は，イブラーヒームとともに「Nāy の砦（ḥiṣār-i Nāy）」に幽閉されていたのだという［ĀḤ : 105］。

3）同様に，この場所が牢獄として用いられていたことを示す逸話が Muḥammad 'Awfī の *Jawāmi' al-Ḥikāyāt wa Lawāmi' al-Riwāyāt* に見える。そこではスルタン・マフムードの時代，圧制をなした *shiḥna* が罷免され，後任の *shiḥna* との間にもめ事を起こして Qal'a-i Nāy に投獄されたことが語られている［JḤ : ii－384］。

事の最後の一節「W. jīristān の Qal'a-i Nāy」は重要な意味を持つ。W. jīristān あるいは W. jīr は*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の中に何度か現れる地名である。ハビービーはこれを現在のウルズガーン（Urzgan）州のアジュレスターン（Ajrestan）のまちに比定する。そこはダシュテ・ナーウル（Dasht-e Nāwur）の西，ジャーグリーの北にあたる（Cf. [ṬN : i-351, n. 5 ; Adamec 1980 : 28]）[4]。

Ṭabaqāt-i Nāṣirī によれば，ゴール朝の最も有名な君主であるギヤース・アッディーン（Ghiyāth al-Dīn Muḥammad）とムイッズ・アッディーン（Mu'izz al-Dīn Muḥammad）の兄弟は，ガズニーンの征服者として知られるアラー・アッディーン・ジャハーンスーズ（'Alā al-Dīn Jahānsūz）によって W. jīristān[5] の砦に幽閉されていた［ṬN : i-346］。アラー・アッディーンが最初に与えられた領地も W. jīr であった可能性がある［ṬN : i-336］。また彼らに先立つシャンサバーニー家の当主クトゥブ・アッディーン（Quṭb al-Dīn Ḥasan b. 'Abbās）の時代，W. jīristān のタガーブ（Tagāb）の住民が叛乱を起こしたという記録も同書にはある［ṬN : i-333］。

タガーブは現在ヘルマンド（Helmand）川の最上流の峡谷中に見える同名の村と同じものであろう。旧ソ連軍参謀本部が作成したアフガニスタンの 20 万分の 1 地図である *Карты Афганистана* によればこの村の位置は大体北緯 33 度 54 分，東経 66 度 58 分，行政区分でいえばバーミヤーン州の最南端のあたり，それがワルダク（Wardak）州，ガズニ州，ウルズガーン州と接する深い山中にある。この*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* の情報と *Chahār Maqāla* のそれとをあわせると，W. jīristān については最小でも現在のタガーブからナーイ・カラにまたがる地域であったといえる。そうであれば，この地域はカーブル，ガズニの西側にある山岳地帯からさらにはワルダク，ウルズガン地方へと広がる領域を覆ったことになる。

III

ゴール朝時代以降，筆者は諸史料中に W. jīristān への言及を見いだし得ていないが，この地名は玄奘の『大唐西域記』に見える「弗栗恃薩儻那」（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』では「佛栗氏薩儻那」）を想起させる。「弗栗恃薩儻那」という地名の起源や意味については，古く S. Julien [1853 : 378], H. H. Wilson [1841 : 176], A. Cunningham [1979 : 29], T. Watters

---

4） 同じくハビービーは，この地名を Wujwīr と復元し，それが Hujwīr から派生したものではないかと述べる［Ḥabībī 1985 : 37, n.5］。Hujwīr はガズニーンの近郊にあった地名と考えられており，11 世紀の有名なスーフィー伝である *Kashf al-Maḥjūb* の著者 'Alī b. 'Uthmān al-Hujwīrī の故郷である。また C. E. Bosworth は，この W. jīristān と現在の Waziristan（パキスタン）の間になんらかの関係があるかもしれない，と注記している［Bosworth 1965 : 20 & n.3］。

5） W. C. Lees による同書の別の校訂本の当該箇所（Calcutta, 1864, p. 59）は *wḫyrstan* の形を採っている。

[1904－05：ii－266－268]，S. Beal [1983：ii－285] らの諸説があって定まらないが，その位置については比較的明瞭である。すなわちそれはザーブリスターンたる漕矩吒とカーピシーの間に位置するのである。『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻5に次のように言う。

（6） ここ（藍波国）からまっすぐ南へ15日行き，伐羅拏国に至って聖跡を礼拝した。また，西北に向かい阿薄健国へ行き，それから西北へすすんで漕矩吒国へ行った。また北に500里余りすすんで佛栗氏薩儻那国に至った。ここから東にすすんで迦畢試国の国境に出た。[慈恩伝：115；Beal 1986：193]

一方，『大唐西域記』巻12には次のようにある。

（7） 弗栗恃薩儻那国は東西二千余里，南北千余里ある。国の大都城は護苾那と称し，周囲二十余里ある。産物・風俗は漕矩吒国と同じであるが，言語には差異がある。気候は寒さ酷しく，人の性質は烈しい。王は突厥種である。深く三宝を信じ，学芸を尊重し，徳者の言をよく聞いた。

この国より東北して山を越え川を渡り，迦畢試国の辺境の小村を経ること凡そ数十ヶ所で，大雪山の婆羅犀那大嶺に至る。山の嶺は極めて高く，危険な登り道は傾斜が激しい。谷道は曲がりくねり，巌嶺は廻りめぐり，或いは深い谷に入り或いは高い崖へと上っている。盛夏も凍結し，氷を割ってすすんで行く。このようにして行くこと三日を過ぎて，始めて頂上に至るのである。寒風は凄じく，積雪は谷に満ち，旅人はここを通るのに足を止める所とてもない。隼は高く飛び上がっても飛び越えることができず，足で歩いてから飛び降りていく。下の方の山々を見渡すと小さな塚を見るようである。贍部州ではこの嶺は特に高く，その山嶺には樹木はなくただ石の峰ばかりが多くて，叢り立つさまはこんもりした林のようである。

さらに三日進んで始めて嶺を下ることができて，安呾羅縛国に至るのである。[西域記：959－960；水谷 1971：372；Beal 1983：ii－285]

以上の記述をもとに桑山正進は，この地域が南西はワルダクから東はラタバンド（Lata-band）峠までを含むのではないかと示唆した [Kuwayama 1999：57]。当然カーブルはその中に含まれる。そうであれば，それは上述の W. jīristān とも重なりあう地域である。筆者はこの両者，すなわち弗栗恃薩儻那と W. jīristān はそもそも同じものではないかと考える。もしかしたら弗栗恃薩儻那（Fulishisatangna＜*Wulijistān）がメタセーシスによって W. jīristān/Wujīristān（あるいはハビービーによれば Wujūristān）へと変化したのかもしれないし，前者は後者の単なる写し間違いなのかもしれない。いずれにせよほとんど同じ地域を指し，極めて似通った名称を持つ7世紀と12～13世紀のこの二つの地名を同一視することを妨げるものは現在のところない。

しかしながらその場合，弗栗恃薩儻那とカーブルの関係については再考を要するかもしれない。前掲のイスラーム史料にあらわれる Wujīristān はカーブルを含まないからである。一方我々は7世紀の後半，いわゆるカーピシー地域の政治的中心がカーピシーからカー

ブルへと移動していったことを知っているが，中国側の史料はその後もこの地を同じ名，すなわち罽賓という名で呼び続けている。この事実はカーブルが当時カーピシー地域に含まれていたことを示唆しているようにも見える。ただし，漢文史料中に言及される地名のどれがカーブルにあたるのかが判然としないため，詳細については不明とせざるを得ない[6]。

さてヴェラルディによれば，カラバーグとジャーグリーの石窟群は，それぞれの石窟が不規則なレヴェルに穿たれ，しかもお互いがトンネルないし山肌に刻まれた階段で結びついているという，独特の構造をもっている。このような石窟の形態は近隣地域には類例がなく，ひとりバーミヤーンの石窟群のみがそれと共通する特徴を有している [Verardi 1977: 17-20]。このことはこれらの石窟群の年代に大枠を与えるとともに，バーミヤーン地域とこの地域の間になんらかの連関があったことを示していると考えられる。上述のように玄奘の時代，弗栗恃薩儻那からの道はカーピシーの境界を経て婆羅犀那大嶺へと至るが，後者の峠は現在のハワク (Khawak) 峠に比定されている [Beal 1983: ii-286, n. 10]。つまり，この道の後半部分は現在のチャーリカール (Chārikār) からパンジュシール (Panjshīr) 川に沿って東北東へ進み，ヒンドゥークシュ山脈を越える道にあたるのである。一方チャーリカールから反対側，西の方にはゴールバンド (Ghorband) の渓谷がバーミヤーン方面に向けて延びている。直接的証拠に欠けるものの，玄奘の報告は弗栗恃薩儻那を通り，カーブルを迂回してバーミヤーンに至る道の存在を示唆しているとも考えられる。ヤアクーブ・ブン・アルライスが Nāy Lāmān を陥したあと，バーミヤーンを経てバルフに向かったという *Tārīkh-i Sīstān* の記述はこの観点からすると興味深い[7]。

IV

Qal'a-i Nāy に関して，それが王子達の隠れ場所，財宝の隠し場所，難攻の拠点，あるいは罪人の牢獄として用いられたことから，現在のナーイ・カラに比定できるという点は先に述べたが，Qal'a-i Nāy の持つそれらの性格は同時に，この地が周辺からかなり孤立した場所であったことをも意味する。*Tārīkh-i Sīstān* の記述に従えば遅くとも 9 世紀の後半まで

6） 両『唐書』，『大唐西域記』を含め，隋唐時代の中国史料にはそもそもカーブルにあたりそうな地名は現れない。詳しくは桑山 1990: 268 参照。なお，玄奘当時すでにカーブルが弗栗恃薩儻那のテュルクの影響下，あるいは支配下にあった可能性ももちろんあるが，同じときに同地がテュルク勢力の中心地たりえたかどうかは別に考察を要する問題である。

7） 現在，カーブルからカーブル川沿いに西へ向かい，ウナイ峠を越えてから北へ折れ，ハジガク峠を越えてバーミヤーンに至る道があるが，この道が中世以前に存在した証拠はない。また，玄奘の旅程として考えた場合，この道からハワク峠に向かうのは大きな遠回りであり，玄奘の記述がこの道を意識したものとは思われない。

遡ってそのような環境を想定することができる。すなわち9世紀後半以降，カラバーグからアルガンダーブの最上流域へと向かう道は，少なくとも交易あるいは旅行のルートとして主要なものではなかったであろうと。しかしながらそれ以前はどうであったのか。

この点に関してかつてフシェ（Alfred　Foucher）は，　玄奘の時代カンダハールとカーピシーを結ぶ幹道は現在のそれではなく，アルガンダーブ流域からワルダクの山岳地帯を通っ

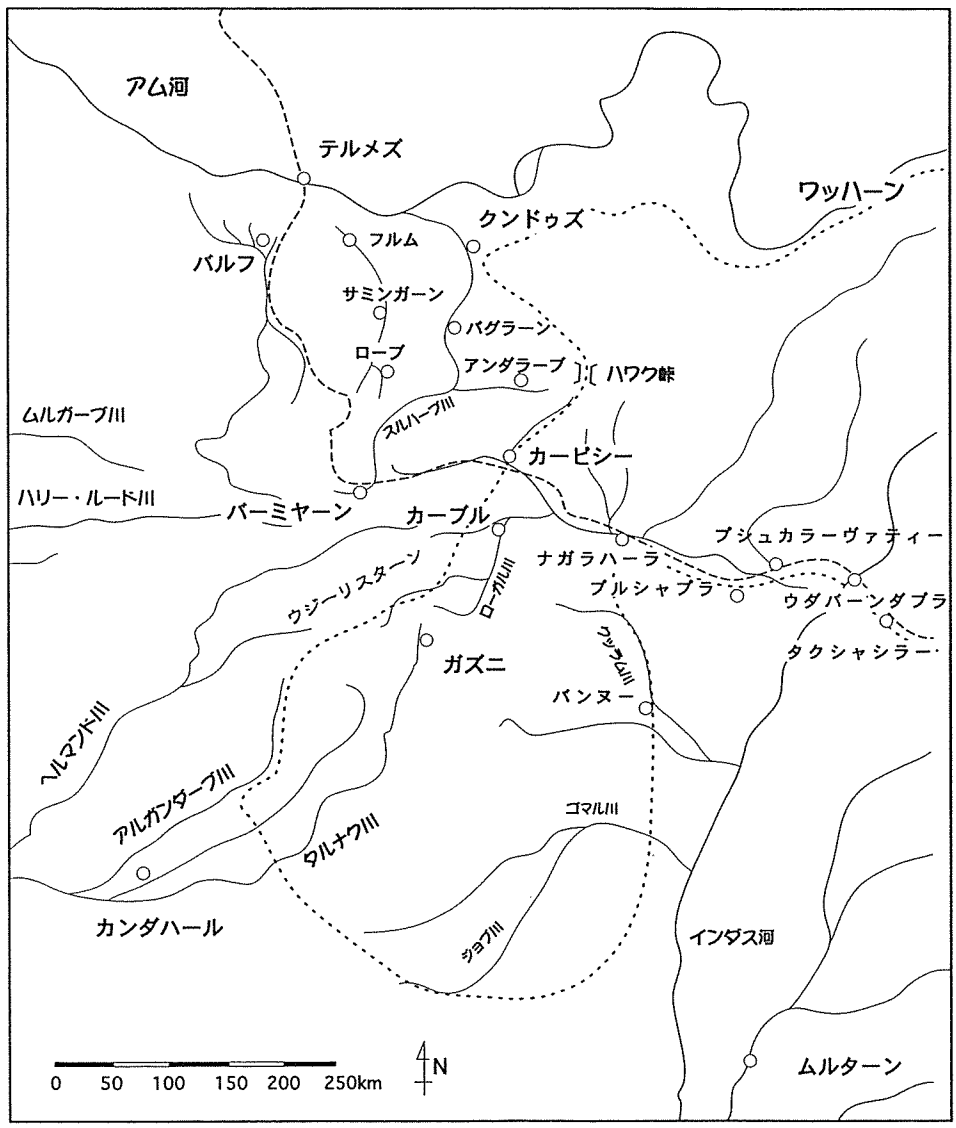

図2　フシェの復元する玄奘のルート（往路　----　復路　……）
（Foucher 1947, Fig. 39 をもとに作図）

ていたのではないか，との仮説を提示した（図2参照）。彼はまた，玄奘の漕矩吒を* Jāguḍa と復元し，それを現在のジャーグリーにあてたのである [Foucher 1947: 230－34][8]。ボンバーチ（Alessio Bombaci）はフシェの用いた史料，特に玄奘のそれに焦点をあて，この仮説に疑問を呈しているし [Bombaci 1957: 254]，フュスマン（Gerald Fussman）も，一年の内六ヶ月間雪で閉ざされるダシュテ・ナーウルを越える道が幹道だったとはとても考えられないと述べている [Fussman 1974: 68]。また吉田豊は漕矩吒の原音について詳細に検討し，それがフシェの言うように Jāghurī を写したものではなく，*(d) zāul のような音を写したものであろうとする [慧超伝: 135－39]。このようにフシェ以後の研究成果には彼の仮説に否定的なものが多い。

結局，玄奘の記述に関して言えば，それはカンダハールからカーピシーという長い区間に関してではなく，せいぜい漕矩吒の都たるガズニからカーピシー方面へと至る，しかもおそらくは副次的なルートについてのものだと解する方がいいのかもしれない。フュスマンによれば，ダシュテ・ナーウルから北へ向かう道はワルダク川にいきあたったところで行き止まりになる。しかし一方同じくフュスマンによれば，ワルダク川流域には，カーブルから Behsūd にかけていくつかの遺跡が点在している [Fussman 1974: 68－69]。1837年 G. T. Vigne がガズニからカーブルに向かう時にとった道は，ガズニからまっすぐ北上して Band-i Sulṭān を越え，Jaghatu Killah を通過し，Seiab からマイダーン（Maydān）を通ってカーブルに至るという，「通常のキャラバン・ルートではない道」であった [Vigne 1986: 135－41]。ちなみに後述のジャガトゥー（Jaghatū）碑文が発見されたのは，まさに Vigne の言う Jaghatu Killah の近くである。

それではどうしてアルガンダーブ最上流域という険阻な地にこれほどの数の石窟が開窟されたのか。現在利用可能な材料をもってこの問に明確な答えを出すのは容易なことではない[9]。しかしながらその点に関係するかもしれない状況証拠を一つ挙げることはできそうである。

上述のごとく玄奘の弗栗恃薩儻那が Wujīristān にあたるとして，『大唐西域記』の記述からはその地が7世紀前半，突厥＝テュルクの首領の支配するところであったことがわかる。この突厥は7世紀後半にはカーブルに居を構え，北進するアラブ勢力と戦った，いわゆるテュルクシャー朝を形成する。ペテク（Luciano Petech）[1964: 294] とラフマン（Abdur

8） フシェはまた，弗栗恃薩儻那およびその王は，イスラーム資料に言う Gharchistān およびその支配者である *shār* となんらかの関係があるのではないか，と示唆している。

9） この問題に関しては発見者たるヴェラルディ自身が現在準備しつつある報告書（*Rock-cut Buddhist Caves of Jaghuri and Qarabagh-e Ghazni, Afghanistan*（仮題））において検討している。筆者は氏のご厚意によって同報告書の草稿を目にする機会を得たが，氏はムスリム勢力とテュルクの王国の間の紛争，および東部アフガニスタンにおける仏教の衰退とヒンドゥーイズムの隆盛とに石窟開窟の背景を求めている。詳細については上記報告書を参照されたい。

Rehman）[1979：40－45] はこのテュルクをハラジュ（Khalaj）部族であると考える。ハラジュのテュルクは，イスタフリー（al-Iṣṭakhrī）の地理書 [Iṣṭ：245] 等から，10 世紀頃ヘルマンド川中流のブスト，ザミーン・ダーワル（Zamīn Dāwar）近辺にいたことが知られているが，近年アフガニスタン北部から発見されたバクトリア語文書群のなかでも言及されている。同文書群のうち，7 世紀後半と 8 世紀前半の日付を持つ二点の中に「khalas」という語が見えるのである [Sims-Williams 2000: 82, 98]。シムズ＝ウィリアムス（Nicholas Sims-Williams）によれば，それらこそハラジュに関する最も早い言及である。シムズ＝ウィリアムスは，これらバクトリア語文書群のかなりの部分が Rob（現 Doāb-i Rūy。ヒンドゥークシュ山脈北麓，フルム（Khulm）川の上流の地）の王の文書庫に由来するものではないかと考えている [Sims-Williams 1997：20]。実際文書にはサミンガーン（Samingān），Rob, Kah, Madr（後の Kahmard）などフルム川沿いの地名が頻出している。これらの事実は，ハラジュのテュルクが 7 世紀から 8 世紀にかけてヒンドゥークシュ山脈の北側にいたことを証する。もしペテクやラフマンに従うなら[10]，それらをヒンドゥークシュ山脈の南にいた同族のテュルク，すなわち弗栗恃薩儻那の突厥と結びつけることが可能であろう。

ハラジュのもともとの故地は中央アジアのどこかだと考えられている。そこから彼ら（ないしは彼らのうちのある者たち）は西へ，および南へと移動し，イスタフリーが記録するごとく 10 世紀にはアフガニスタン南部のブスト，ザミーン・ダーワル近辺にいた [Minorsky 1940：430－31；1982：347－348]。さて，もしヒンドゥークシュ北側のテュルクが山を越えて南へ進み，おそらくはまず弗栗恃薩儻那に到達したとするなら，彼らの通った道こそが，弗栗恃薩儻那と，ヒンドゥークシュ越えの要地であるバーミヤーンを結びつける筈である[11]。

弗栗恃薩儻那のテュルクの一部は前述の如く 7 世紀後半にカーブルとザーブリスターンに政権をたて，それらは 9 世紀にサッファール朝と，ガンダーラで興ったヒンドゥーシャー朝に倒されるまで存続した。カラバーグとジャーグリー地域の石窟群の開窟の背景の一つをここに求めることはできまいか。上述のごとく玄奘によれば弗栗恃薩儻那のテュルクあるいはその首領は深く三宝（仏，法，僧）を信じていたという。8 世紀に同地を訪れた新羅の僧慧超は，罽賓（実際はカーブル）の民やザーブリスターンの王達は仏教を信仰していると伝える [慧超伝：40]。この点に関しては，ガズニの北，ジャガトゥーの地で発見された二点のバクトリア語碑文の内容も興味深い。そのうちの一点は仏教の三宝讃であり，もう一点はフンバッハ（Helmut Humbach）によってテュルクシャー時代に属するものと解されているの

10）ペテクやラフマンのこの同定は，残念ながら十分な証拠や検討を伴ったものではないが，筆者も基本的にヒンドゥークシュ南側のテュルクをハラジュにあてることには同意する。詳細については別稿で論ずる予定である。

11）ヒンドゥークシュ越えにおけるバーミヤーンの重要性，あるいはバーミヤーン経由ルートそのものの興隆の経過については桑山 1985；1990 を見よ。

である [Humbach 1967; cf. Scerrato 1967]。これもまた同王朝と仏教との関連を示すものと言えよう[12)]。

一方，別のバクトリア語碑文がウルズガーンにおいて発見されている。発見者のビーヴァー (A. D. H. Bivar) は，9世紀以前のザーブリスターンの支配者をエフタル系とみなすギルシュマン (R. Ghirshman) らの見解に従い，これをザーブリスターンのエフタルの支配者に結びつけて解釈したが [Bivar 1954]，フンバッハはこれをも同じくテュルクに関連づけて読み解いている [Humbach 1966: 103-04]。仏教的内容はないものの，ウルズガーンの碑文はジャガトゥー碑文とともに，カーブル，ガズニの西側の山岳地帯と両地方のテュルク系の支配者の関連を示唆するものと位置づけることができる。言うまでもないことだがウルズガーン地域からは，ヘルマンド川に沿って，10世紀のアラブ地理書が報告するハラジュの居住地であるところのブスト，ザミーン・ダーワルへと至ることが可能なのである。

おわりに

以上，ナーイ・カラと Qal'a-i Nāy の比定を手がかりに，玄奘の記録する弗栗恃薩儻那および同地の突厥の動向と関連づけつつ，アルガンダーブ最上流域に位置する石窟群開窟の背景を考察した。ここまでの議論が有効なものであるなら，玄奘の弗栗恃薩儻那，すなわちイスラーム資料の Wujīristān は7世紀あるいはそれ以前の時期において，ハラジュ・テュルクの揺籃の地となったと考えられる。彼らの一部はそこからカーブル，ザーブリスターンに進出して王国を築き，またおそらくは別の一団がアルガンダーブあるいはヘルマンド川沿いに南下し，ブスト，ザミーン・ダーワル方面に広がっていったのではないか。ナーイ・カラをはじめとする石窟寺院の存在の背後にこのような状況があったと，ここではひとまず推測しておきたい。なお，これらのテュルクがいつ，どのようにこの地域に移り住んできたのか，彼らがどのように当該地域の歴史と関わったのか，という点に関しては稿を改めて論ずる予定である。

参考文献

ĀḤ: Fakhr-i Mudabbir. *Ādāb al-Ḥarb wa al-Shujā'a*, ed. Aḥmad Sukhaylī Khānṣārī, Tehran, 1967.

ChM: Niẓāmī Arūḍī Samarqandī, *Chahār Maqāla*, ed. M. Qazwīnī, Leiden, 1910.

---

12) しかしながら，テュルク支配時代のこの地域の宗教事情はもっと複雑であったと考えられる。そこでは仏教の他にもバラモン教／ヒンドゥー教的信仰やゾロアスター教，あるいはそれらの融合した形態の信仰が行われていた [桑山 1972; 1992; Humbach 1996: 250]。

DMS : *Dīwān-i Mas'ūd Sa'd*, ed. Mahdī Nūriyān, Isfahan, 1986.

Iṣṭ. : al-Iṣṭakhrī, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1967.

JḤ : Muḥammad 'Awfī, *Jawāmi' al-Ḥikāyāt wa Lawāmi' al-Riwāyāt*, ed. Amīr Bānū Muṣaffā & Maẓāḥir Muṣaffā, 2 Vols., Tehran, 1975.

TB : Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Tārīkh-i Bayhaqī*, ed. 'A. A. Fayyāḍ, Mashhad, 1977.

TG : 'Abd al-Ḥayy Gardīzī, *Tārīkh-i Gardīzī*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tehran, 1988.

ṬN : Minhāj Sīrāj-i Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāṣirī*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, 2 Vols., Kābul, 1964.

TS : anonym., *Tārīlkh-i Sīstān*, ed. Malik al-Shu'arā Bahār, Tehran, 1938.

西域記：季羨林等校注『大唐西域記校注』(上, 下), 中華書局, 2000.

慈恩伝：范祥雍点校『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』, 中華書局, 2000.

慧超伝：桑山正進編『慧超往五天竺国伝研究』, 京都大学人文科学研究所, 1992.

Adamec, L. W. (1980) *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan*. Vol. 5. Graz.

Арендс, А. К. & Л. М. Епифанова (пер) (1991) *Зайн ал-Ахбар*. Ташкент.

Beal, S. (1983) *Buddhist Records of Western Countries*. (rep ed). New Delhi.

Beal, S. (1986) *The Life of Hiuen-Tsiang*. (rep ed). Delhi.

Bivar, A. D. H. (1954) The Inscriptions of Urzgan. *JRAS* 1954 (3 & 4), 112 – 118.

Bombaci, A. (1957) Ghazni. *EW* 8 (3), 246 – 259.

Bombaci, A. (1970) On the Ancient Turkic Title Eltäbär. *Proceedings of the IXth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*. Naples, 1 – 66.

Bosworth, C. E. (1965) Notes on the Pre-Ghaznavid History of Eastern Afghanistan. *IQ* 9, 12 – 24.

Bosworth, C. E. (1994) *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz*. Columbia Lectures on Iranian Studies 8, Costa Mesa, California & New York.

Cunningham, A. (1979) *The Ancient Geography of India*. (rep ed). Delhi.

Foucher, A. (1947) *La Vieille Route de l'Inde de Bactres à Taxila* II. *MDAFA* 1, Paris.

Fussman, G. (1974) Ruines de la Valée de Wardak. *Arts Asiatiques* 30, 65 – 130.

Gold, M. (tr) (1976) *The Tārīkh-e Sīstān*. Rome.

Ḥabībī, 'A. Ḥ. (1985) *Tārīkh-i Afghānistān ba'd az Islām*. Tehran.

Harmatta, J. (1969) Late Bactrian Inscriptions. *ActOH* 17, 297 – 432.

Harmatta, J. (1996) Tokharistan and Gandhara under Western Türk rule (650 – 750). In : Litvinsky, B. A., Zhang Guang-da & R. Sh. Samghabadi (eds) *History of Civilizations of Central Asia* III. Paris, 367 – 383.

Humbach, H. (1966) *Bactrische Sprachdenkmäler* I. Wiesbaden.

Humbach, H. (1967) Two Inscriptions in Greaco-Bactrian Cursive Script from Afghanistan. *EW* 17 (1 – 2), 25 – 26.

Humbach, H. (1996) Pangul, a Turco-Bactrian Ruler. *Bulletin of the Asia Institute* 10, 247 –

251.

稲葉穣（1991）七－八世紀ザーブリスターンの三人の王『西南アジア研究』35, 39－60.

Jalālī, Ghulām Jīlānī (1973) *Ghazna wa Ghaznaviyān*. Kābul.

Julien, S. (1853) *Histoire de la Vie de Hiouen-Thsang*. Paris.

桑山正進（1972）大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか『東方学報』京都, 40, 1－54.

桑山正進（1985）バーミヤーン大仏成立にかかわるふたつの道『東方学報』京都, 57, 109－209.

桑山正進（1990）『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.

桑山正進（1992）ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年『西南アジア研究』35, 22－38.

Kuwayama, Sh. (1999) Historical Notes on Kāpiśī and Kābul in the Sixth-Eighth Centuries. *Zinbun* 34 (1), 25－77.

Marquart, J. (1901) *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.

Minorsky, V. (1940) The Turkish Dialect of the Khalaj. *BSOS* 10 (2), 417－437.

Minorsky, V. (tr) (1982) *Ḥudūd al-'Ālam : The Regions of the World* (2nd ed). Cambridge.

水谷真成（訳注）（1971）『大唐西域記』（中国古典文学大系 22）平凡社.

Petech, L. (1964) Note su Kāpiśī e Zabul. *Rivista degli Studi Orientali* 39 (4), 287－294.

Rehman, A. (1979) *The Last Two Dynasties of Śāhis*. Islamabad.

Scarcia, G. (1965) Sulla religione di Zabul. *Annali dell'Istituto Orientale di Napoli* 16, 119－165.

Scerrato, U. (1967) A Note on Some Pre-Muslim Antiquities of Ǧaġatū. *EW* 17 (1－2), 11－24.

Sims-Williams, N. (1997) *New Light on Ancient Afghanistan*. SOAS.

Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan* I. Oxford.

Sims-Williams, N. (2002) Ancient Afghanistan and its Invaders: Linguistic Evidence from the Bactrian Documents and Inscriptions. *Indo-Iranian Languages and Peoples*. Oxford, 225－242.

Taddei, M. & G. Verardi (1984) The Italian Archaeological Mission in Afghanistan: Brief Account of Excavation and Study. *Studi di storia dell'arte in memoria di Mario Rotili*. Napoli, 41－70.

Verardi, G. (1977) Report on a Visit to Some Rock-cut Monasteries in the Province of Ghazni. *EW* 27 (1－2), 3－24.

Vigne, G. T. (1986) *A Personal Narrative of a Visit to Ghuzni, Kabul and Afghanistan*. (rep ed). Delhi.

Watters, T. (1973) *On Yuan Chwang's Travels in India*. (rep ed). Delhi.

Wilson, H. H. (1841) *Ariana Antiqua : A Descriptive Account of the Antiquities and Coins of Afghanistan*. London.

（京都大学人文科学研究所）